

紙コップに猫のイラスト描きたして渡してくるカ
フェの木田さん 鈴木陽美

行きつけのコーヒーショップで、作者の猫好きを知ってサービースに猫のイラストを紙コップにいつも描いてくれるのだろう。スナップ写真のように、日常生活のなかの、特に意味のない場面をすくいとるように表現して魅力的な一首にしている。

コロナ禍の卒業式は簡素なり校歌一番まで斉唱もなし 久松宏二

高校教員の卒業式の歌。毎年参加してきているので、作者には新型コロナ時代の超簡素な卒業式の異例ぶりがよく見えるらしい。おのずからユーモアの味が感じられるのは、下句に「いいかげんにせいよ」といった作者の思いが読者に読みとれるからだろう。

『てぶくろ』はウクライナ民話と気付く夜のわれの隣に戦争がいる 古島信子

ロシアのウクライナ侵攻で『てぶくろ』というウクライナの民話を思い出す作が、今月の「心の花」に二首ある。次の永田千奈作とこの作だ。『てぶくろ』のあらすじは次の通り。おじいさんが雪の森の中に、手袋を片方落としました。くいしんぼううねずみが手袋を見つけ、その中で暮らすことにしました。そこへ、ぴよんぴよんがえるや、はやあしうさぎ、おしやれぎつね、きばもちいのしし達が次々とやってきて仲間に入り、手袋は今にもはじけそうになります。やがて落としたことに気づいたおじいさんが戻ってきて、連れていた犬が吠えだてる

短歌の現在

No.494 今月の15首を読む

佐佐木幸綱

と、驚いた手袋の中の住人たちは、森のあちこちへ逃げていきます……。以上、出版元・福音館の要約。

幼き日『てぶくろ』といふ絵本にて知りにし国に戦火が迫る 永田千奈

これもウクライナ侵攻で、『てぶくろ』を思い出している作。「幼き日」を冒頭にもつてきて、ウクライナへの親近感に厚みをもたず工夫がなされている。

情報の歌詠む危険映像を信じる危険されど歌に詠む 楠本邦利

「心の花」今月号には、ロシアのウクライナ侵攻の歌がたくさんある。このことをどうとらえるか。たぶん、ウクライナに行ったことがある人は、いたとしても一人か二人。私も、ポーランドまでは行ったが、ウクライナには行ったことがない。つまりウクライナを詠むには、情報と映像にたよらざるをえないわけだ。その危険を指摘したこの作の重み。ただ、歌としてはいかが？ やはり結句が理におちてしまった、とすべきだろう。

江戸川の流れにそひて影向の松は閑かに時を刻めり 惠木 博

東京の江戸川区東小岩の善養寺境内のクロマツの巨木・「影向かげむかひの松」である。樹齢六〇〇年以上と言われ、繁茂面積は日本一だという。ちなみに東西三十一メートル、南北二十八メートルとか。もちろん国の天然記念物である。こういう特別なものは短歌にしにくいのだが、大きさや広さではなく、「閑かに時を刻めり」と時間を出して成功した。その工夫に注目したい。